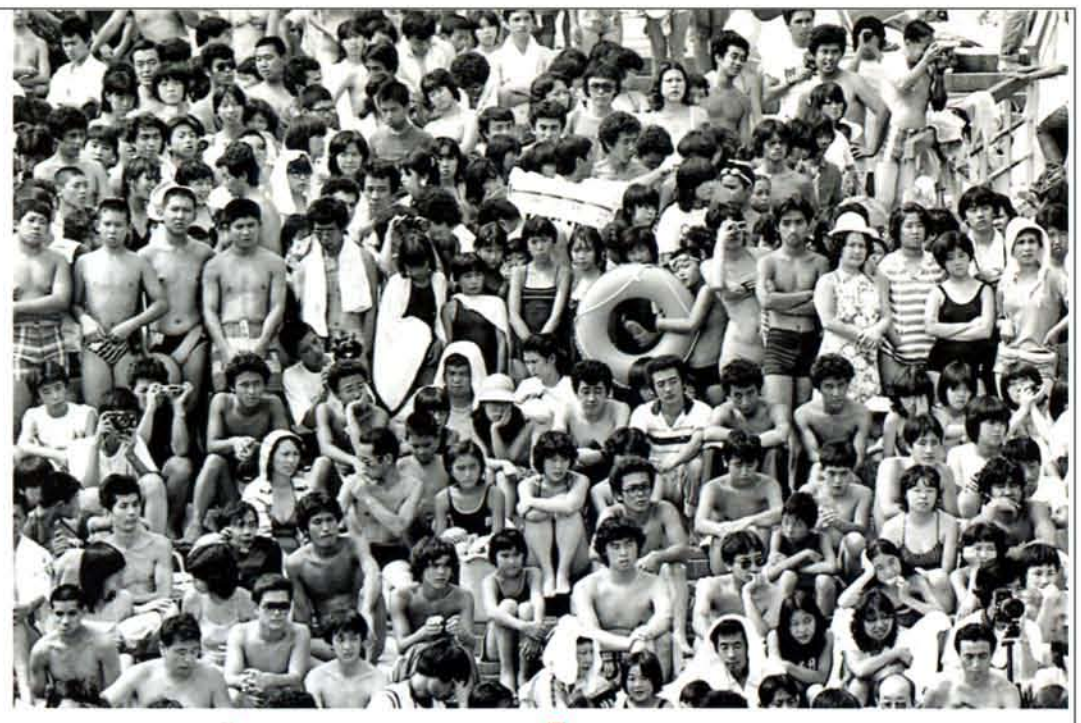


master works, master photographers

写真表現の軌跡

第2部 日本の写真：1950年代から現代まで――東京都写真美術館コレクション展

1999年8月20日(金)～10月31日(日)

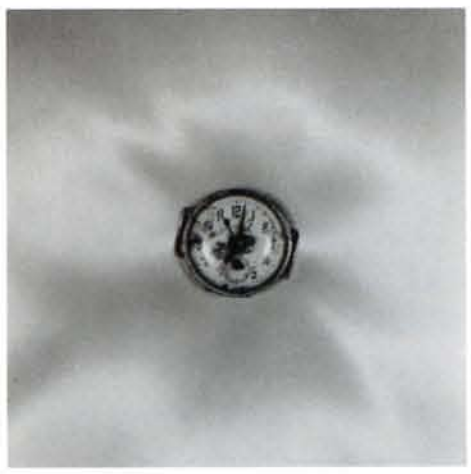
[学芸員によるフロアレクチャー] 毎月＝第1、第3金曜日　午後2時～
[主催・会場] 東京都写真美術館　3階常設展示室
[開館時間] 午前10時から午後6時まで(木・金のみ午後8時まで)入館は閉館の30分前まで
[休館日] 毎週月曜日(休館日が祝日または振替休日の場合はその翌日)
[観覧料] 常設展＝一般500(400)円／小・中・高校生250(200)円
＊都内の小・中学生、第2・第4土曜日に観覧する高校生、要証明)は、常設展のみ無料となります
()内は20名以上の団体料金です。
＊小学生未満、65歳以上の方、および障害のある方とその介護の方1名は無料になります
[交通機関] JR恵比寿駅より徒歩7分(恵比寿ガーデンプレイス内)　お車でのご来館はご遠慮ください。
[インターネットアドレス・NTTハローダイヤル] http://www.tokyo-photo-museum.or.jp　03-3272-8600

第3部 ヨーロッパの写真(仮称)：1999年11月5日(金)～2000年1月23日(日)、
第4部 アメリカの写真(仮称)：2000年1月28日(金)～4月6日(木)　開催予定

編集＝東京都写真美術館　発行＝財団法人 東京都歴史文化財団、東京都写真美術館 ©1999
デザイン＝樺島知忠　製作＝株式会社 求龍堂

東京都写真美術館
〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 Tel.03-3280-0031
1-13-3 Mita, Meguro-ku, Tokyo 153-0062

R50
古紙配合率50%再生紙を使用しています



1 **東松照明《〈11時02分〉NAGASAKI》**
1961, ゼラチン・シルバー・プリント, 25.3×25.1cm
1930年名古屋に生まれる。
旧日本軍の鎮兵場跡の米軍基地に隣接した町に住まいがあった。
愛知大学卒業後、岩波写真文庫のスタッフとなり、
59年セルフ・エージェンシー「VIVO」を設立する。
61年出版の『hiroshima-nagasaki document 1961』
(原水爆禁止日本協議会)に土門拳とともに参加。
日本写真批評家協会作家賞を受賞したこの作品以後も
自らの興味で長崎を撮りつづけ、
66年に写真集『〈11時02分〉NAGASAKI』としてまとめているが、
さらにその後も長崎は撮りつづけられ、発表が続けられている。

2 **川田喜久治《特攻隊員の写真》シリーズ「地図」より**
1960-65, ゼラチン・シルバー・プリント, 45.0×30.0cm
1933年生まれ。立教大学を卒業。
この特攻隊員の写真は、65年に刊行された
写真集『地図』のなかの1枚である。
この写真集について大江健三郎は、「暴力的な世界を、
真にさし示す地図」と書いているが、これらの暗く、
精緻で、偏執狂的な画面は、
川田喜久治の作品にいつも共通しているところである。
細江英公や奈良原一高とともに
59年にセルフ・エージェンシー
「VIVO」を結成(61年まで)している。

3 **細江英公《薔薇刑 #32》シリーズ「薔薇刑」より**
1961, ゼラチン・シルバー・プリント, 20.4×30.5cm
1933年山形県米沢市に生まれる。
三島由紀夫から評論集『美の襲撃』のため
写真撮影の依頼があったのは、
細江英公が28才の秋であった。舞踏家土方巽を撮った写真を
三島が気に入っての指名であったという。
細江英公の、実質的にはデビュー作であったその「おとこと女」と、
この「薔薇刑」、そして再度土方を撮った「鎌鼬」の3作品は、
初期の細江英公を代表する作品というだけではなく、この頃の
日本の写真作品を代表していたものであった。

4 **石元泰博《#3856》シリーズ「シカゴ・シカゴ」より**
1958-61, ゼラチン・シルバー・プリント, 18.2×25.3cm
1921年サンフランシスコに生まれる。24年来日し高知県に住み、39年単身渡米するが、
第2次大戦のため、42年、日系人収容所に収容された。
45年収容所を出るとシカゴに移る。
ケペシュやモホリ＝ナギなどバウハウス系の著作に影響を受け、
シカゴ・インスティテュート・オブ・デザインでキャラハンやシスキンドに学んだ石元は、
52年に卒業すると翌53年来日する。
54年東京で個展。斬新な造形感覚あふれる作品は、センセーショナルな成功をおさめた。
58年出版の『ある日ある所』で日本写真批評家協会新人賞受賞。
60年『桂 日本建築における伝統と創造』出版。69年『シカゴ・シカゴ』出版。

5 **奈良原一高《人間の土地、緑なき島 #12》シリーズ「人間の土地」より**
1954-57, ゼラチン・シルバー・プリント, 21.8×33.0cm
1931年福岡に生まれた奈良原一高の実質的なデビュー作である。
56年、東京・銀座の松島ギャラリーで開催の個展において発表された。
この「2つの島を舞台にしたひとつの物語」では、
そのとおりに2つの場から人間の生きるということを問題にしている。当時のことを奈良原は
「一週間が終わったとき、僕は写真家と呼ばれていた。」と語っている。華々しいデビューであった。
58年の「王国」で早くもその評価を不動のものとし、人気作家の仲間入りを果たす。
62年からヨーロッパ、70年からニューヨークにそれぞれ4年ほど滞在。
その成果は、写真集『ヨーロッパ：静止した時間』と『消滅した時間』として残されている。
以後数多くの作品、写真集を発表し、活躍を続けている。